此等東洋諸國の文化は古來互ひに融通傳播して今日に至つたのであるが、その文化と直接關係せる言語がかく對比せられてあるのは、或る意味からいふと、相互の文化の比較研究の結果を表示したものと見得る樣なこともある、假令ば「茶」なる語が此等諸國に廣く行はれて、獨り西藏丈けには別の言葉のあるが如きはその一例である、よしかゝる風に考へない迄も五國語對譯といふことが甚だ有益な點であることは、必ずしも吸々を要しまい。

其の他西藏語の發音を示して居ることも此の書の價値と見て然るべきであらうが、何處迄重要なものであるか自分には能く解らないから取り立てゝは記すまい。

奉天の宮城內の一閣に滅多に日の光も仰がないで封じ込められた此の書物は、今日ではかけ隔てた日本の國に四個の分身を止めることになつた。一は、文科大學に、二は內藤教授の許に、三と四とは滿鐵の本社と調査部とにある。此れからまた幾つの分身が生じるかは解らない、自分は此の上更に數の殖えることを格別望みはしない、唯だ折角明るみに出た此の書物から、學界の一隅を照らす光明を發せしむるのは、學者の責任であると共に、乾隆帝の英靈に對する最善の供養であると思つて居る。

（藝文第四年第八號、大正二年七月十四日稿）